

七月のさよなら

文鳥

校門をくぐる。ほんの三か月前まであふれんばかりに咲いていた桜は散り、青々とした葉が頭上でザワザワと音を立てる。四か月前に卒業したばかりの中学校を訪れようと言いだしたのはあまり彼女らしくないなど、木漏れ日によって斑に照らされながら隣を歩く親友を見やって思う。未だ少し着慣れない制服の赤いリボンが二人分、示し合わせたかのように揃って揺れる。吹き抜けた風の匂いに、向日葵の季節の片鱗を見た。

「ひなた、こっちでしょ」

駐輪場を過ぎて、下駄箱が並ぶ昇降口に向かおうとした私を呼び止め、奈緒は来客用の職員玄関を指さした。え、何で？そう言おうとして、直前で口を噤む。それもそうだ。『卒業生』なんて、立派に来客だろう。そうだとこののに、風邪薬のカプセルが確かに喉を通ったはずなのにまだ居座っていると錯覚するようなあの感じが、消えてくれない。奈緒もそうなのかと尋ねたかったけれど、理由も何もわからないまま言葉にできるほど、私は器用じゃないから、涼やかな彼女の声に答えて、その背を追うに留めた。職員玄関から中に入り、脱いだ靴を焦げ茶色のタイルの上に揃えて、スリッパをはく。歩きにくいし、階段だと脱げやすいから

好きじゃないんだよな。上履きだったらそんなことはないのに。

飴色の廊下を進んで、職員室に入る。

「失礼します」

夏休みで、おまけに部活動中らしいこともあってか、人影はまばらだった。特徴的な並びのデスクの上にある、山のように積まれた書類、それぞれに色や形の違うマグカップやキャラクターグッズは、まさに先生たちの個性の具現だ。目的の人物は部屋の中心辺りの席でパソコンとにらめっこしていたが、奈緒の声に振り返ると、驚いたように眉を上げた。

「平戸と、桜井じゃないか。久しぶりだな」

椅子の傍に行き、お久しぶりです、と流れるように返す奈緒に私も続く。私達が三年生の時の担任だった先生は、胡麻塩頭も、縁なし眼鏡も記憶の中のままであった。

「卒業式以来だな、お前らは同じとこ行ったんだったか」

「はい」

「そうです！」

「どうだ、高校生活楽しんでるか？」

「はい！ ねえ、奈緒？」

「うん」

「なら良かった、せっかくだから校舎見てったらどうだ？」

「初めからそのつもりです！」

「こら、ひなた」

「はは、正直な奴め」

——そうだ。今、弓道部も部活やってるぞ。

可笑しそうに笑った先生が何気なくこぼした一言は、冷めてしまったホットミルクみたいにぼんやりとした響きを持っていた。奈緒が何と返したのかはよく聞こえなかったが、先生はそうかと微笑みながら頷いた。本当は聞き逃したんじゃないことを知ってか知らずか、窓の外では蟬達
が、責めるみたいに鳴いていた。

三階まで階段を登るのはこんなにも体力を必要としたのだろうか？息も絶え絶えになりながら登り終えた私を奈緒は呆れたように見た。むしろなぜ奈緒は平然としているのだろう。高校の現在使っている教室は一階だし、三階分の階段を一気に登るなんてそうそうないだろうに。先に行くように促し、少し落ち着いてから顔を上げて、奈緒と過去の自分たちの足跡を辿る。右に曲がって、少し進む。そして、立ち止まり、こちらを振り返る彼女から数メートルほどあけて、同じように立ち止まって、感情の読めない黒い目に導かれるように自分も視線を動かし、引き戸の上に掲げられた札を見る。

『三年三組』

私達が、中学生生活最後の一年を過ごした教室の名前。入りたいのか入り

たくないのか、今更自分がわからなくなって、足場にひびが入ったような不安が足を絡め、背中に汗が伝う。薄暗い廊下にずっと立っていられたらとさえ思うけれど、いつのまにやら取っ手に手をかけて、来ないのかと無言のうちに問う奈緒の目にゆらりと小波がたつたような気がしたから、白いシャツをまとった体が少し小さく見えたから、私は重い足を持ち上げ、まどわりつく蔦のような不安を無理やりぶちぶちと引きちぎって彼女に歩み寄った。性格が違って、得手不得手が違って、結局のところ似た者同士なのだ、私達だけが知っていた。

教室には当然ながら私たち以外には誰もいない。机と椅子の大きさはバラバラで、学期中は机の横に様々なものが掛かるのだろう。それでいて、整然と並んでいるさまは、いっそ息苦しいまでに美しい。一人分の混沌が肩を寄せ合っているこの空間が、私は嫌いではなかった。そろりと手をのばし、窓を開ける。風と共に飛び込んできた空の青さに思わず目を細めた。そのまますぐ横の椅子を引いて座る。窓際の前から二番目。私が最後に座っていた席。教室の後ろから聞こえた、ガタンという音が、奈緒も同じようにしたことを教えてくれた。頬杖をついて窓の方を見る。私はセーラー服を着て、よく同じように空を眺めていた。我ながら不真面目な生徒だったなど苦笑する。先生には苦勞をかけただろう。まあ授業態度は高校でもさほど改善されてはいないのだが。正面に向き直ると黒板が見えた。右端に目をやると、書かれた日付は九月一日。未来を先

取りなんて、せっかちな。外から聞こえるのはテニス部の声援と、野球部のバットが生み出す金属音。それらにつられてか、耳の奥に蘇るのは鋭く空気を切り裂く音。それはいつだって放たれた瞬間に、自分を置き去りにして、祈る間もなく予定調和を連れてきた。思い出したという事実、それ自体に泣きたくなる。この机の横には、忘れ物であろう袋が一つ。名札は見えないけれど、ひっくり返す勇氣はあいにく持ち合わせしていないんだ。立ち上がり、机の間を縫って、突っ伏している奈緒のもとへ行く。

「奈緒」

行くんでしょ、弓道場。私がそう言うと、顔を上げた奈緒は少し笑った。

サッカー部が練習しているのを横目に芝生を踏みしめながらグラウンドを迂回する。部活の行き帰りによく通ったルートだ。

「ねえ、ひなた」

「何？」

「覚えてる？ 卒業式」

「覚えてるよ」

緊張しすぎて、校歌の歌詞を間違えたことは早く忘れてしまいたい。けれど悲しいことに、忘れたいことほど記憶に残る。けれど、それ以上に印象に残っているのは、別のことだ。

「みんな泣いてたね」

「うん」

そう、みんな泣いていた。でも、私は泣かなかった。奈緒も泣いていなかった。他の子たちをなだめながら、内心で首を傾げていた。離れたいほど仲がいい子同士は、たいてい連絡先を知っているし、高校だつて県内に進学する人がほとんどだ。冷たいと言われなかったのは幸運というよりも、人に恵まれたというほかない。そんな優しい彼らは、一体何がそんなに悲しかったのだろう。

「お願いします」

達筆な字で弓道場と書かれた札の隣にある戸口に入る前にそういって頭を下げる。それがここでの礼儀だと、頭より先に身体が判断した。いつも塗るハンドクリームの香りが、いつのまにか私自身に染みついてきたような感じだった。

「平戸さん！ 桜井さん！ お久しぶり、どうしたの？」

休憩中だったらしく、奥の方から顧問の先生が声をかけてくれた。私たちが在籍していた時から担当が変わっていないことに胸をなでおろす。三年生と二年生は挨拶をしてくれたが、一年生は誰だかわからず戸惑っていて、なんだか申し訳なくなってくる。靴を脱ぎ、板張りの床をすり足で進む。先生のところに行こうとして、射形を見るために壁に設置されている大きな姿見の中の自分と目があった。その奥には喋を付けたら、矢を取り出す後輩達。パチリ。鏡像も私と同じで違う瞬きをした。

リボンと揃いの色をしたスカートが歩みに合わせてかすかに揺れる。慣れた空間のはずなのに何かが足りないような、寧ろ、多すぎて氾濫しているようなこの違和感はどうしてだろう。

「少し、顔を見せに来ました」

「あらそうなの、今から練習再開するから少し見ていったら？」

「じゃあお言葉に甘えようか」

「うん。ありがとうございます」

道場の隅に正座をする。始めと響いた声を合図に、六人が射場に入る。足踏みから始まり、胴造り、弓構え、打起し、引分け、会と続く。綺麗だ。羨ましいくらいに型に沿った、癖のない動き。針の先程の油断も隙も許されず、弦が引かれるにつれて、その場の空気も張りつめていく。思わず、見ている側も息を詰める。凧だ水面に葉から水滴が垂れるのを今か今かと待つような、静寂。そして離れの瞬間、矢が、物凄い速さで的に、安土に突き刺さる。パアンという破裂音と聞き慣れたリズムの拍手。矢を放った生徒が残身を終え、弓倒しをして、次の生徒が引分けを始めるまで、私も奈緒も、瞬きを忘れていた。そういえば、私の道着と胸当て、それに喋と矢はどこにあるんだっただか。そんなことを考えていると、残身は残心とも書くのだと何故だか不意に思い出した。

後輩達や先生に別れを告げて、校門のところまで戻ってきた。校舎に入る前に感じた何かは消えるどころかむくむくと膨れ上がっていた。苦

しくて仕方がないのにどうすればいいのか見当もつかない。

「ねえ、奈緒」

足は縫いとめられたように動かない。縋るように名前を呼ぶ。助けて。苦しいの。何でなのかわからない。分らないから苦しいの。どうすればいいか教えてよ。奈緒ならわかるんでしょ。だから連れてきたんでしょ。

「寂しいからでしょ」

先を歩く奈緒が立ち止まって、振り返らないまま言った。

さびしい？誰が？奈緒が？

……私が？

嘘だ。そんなわけない。だって、だってそんなのおかしいじゃないか。今日はお世話になった先生たちにも、後輩達にも会えた。それに奈緒だっている。けれど、笑い飛ばそうとして、できないことに気づく。おまけに奈緒が無造作に投げた答えは悔しいくらいにあっさりど、欠けているピースをはめた。違和感の源泉に名前を付けた。昔から、彼女は言葉を見つけるのが上手い。ああそうだ。私はいつだって、気がつくのが遅すぎる。最後の大会が終わった後、胸にぽっかり空いた空白に、自分が弓道を好きだったことを知ってしまうくらいに。そうだよ、認める、全面降伏だ。だって、あの下駄箱は私たちのものだった。あの教室は、席は、弓道場は、私たちの居場所だった。それなのに卒業式が終わったとたんにお客様扱いなんて、ひどいじゃないか。もう一度弓道場へ行ったところで、私たちの番が回ってくることはないだろう。知っていたのに、それがただただ悲しくて、寂しい。あの卒業式の日泣いていた同級生

たちは自覚のあるなしに関わらず、きつと正しく理解していたのだ、これから得るたくさんのものと引き換えに、自分たちのものだったはずの居場所がいくつか失われたことを。等価交換。基本中の基本、わかっている。でも、理解と感情は別物だ。奈緒が振り返った。その両目から、花弁が舞うようにはらはらと涙がこぼれているのを認めるのとほぼ同時に、私は彼女に抱き着いた。そして二人でわあわあと声を上げて泣いた。胸をふさいでいた違和感は穴の開いた風船みたいにしぼんでいく。

「泣かないで、ひなた」

「泣かないでなんていわないでよ、奈緒だって泣いてるくせに」

「そうだけどさ」

「ねえ」

「なに」

「……ありがとう」

「……うん」

どちらの声も震えていた。たぶん、奈緒が母校を訪ねようなんて、柄じゃないことを言い出したのは、自分だけじゃなくて、私のためでもあったのだ。大人ぶってはいたけれど、その実、誰より子供だった私達は、泣かないんじゃないかと、泣けなかった。別れどころか旅立ちそのものを認められないまま、心を残して行ってしまった。桜は葉桜で、在校生の見送りもないけれど、音楽の代わりを務める蝉の声が鼓膜を揺さぶり、空は憎らしいほど青く澄んでいる。新たにどれほどたくさんのものを得ても、失くすことに慣れる日はこないだろう。けれど、欲張りな私たちの腕は二本しかなくて、そんなに多くのは持てない。指の間から漏

れる砂みたいにしても取りこぼしてしまう。今だって互いを抱きしめるだけでいっぱいいっぱいだ。だから私たちは何度だって、立ち止まり、戻れない時を振り返る。だって、失くしたものは美化されて記憶の中でキラキラ光る。触れられなくても、あまりに眩しいそれらを、過去というラベルで一緒にしたにするのは寂しすぎるから。

ありがとう。さよなら。大好きだったよ。

この涙と、腕の中の体温が、あの日泣けなかった私達への餞だった。